ふるさと歴史館第12回企画展

佐久良東雄（さくらあずまお）

石岡が生んだ勤皇の志士の生涯

平成29年
11月1日（水）

平成30年
▶ 1月28日（日）

月曜休館（祝日の場合は翌日）

入館無料

国指定史跡　佐久良東雄旧宅

石岡市立ふるさと歴史館

石岡市総社1-2-10　石岡小学校敷地内
電話　0299-23-2398

石岡市立ふるさと歴史館 第12回企画展

佐久良東雄 ―石岡が生んだ勤皇の志士の生涯

■目次

勤皇の志士　佐久良東雄　1
Ⅰ　林時代　2
Ⅱ　土浦時代　3
Ⅲ　江戸，そして京・大坂へ　4
Ⅳ　その後　6
展示品一覧　8

■例言

本冊子は，平成29(2017)年11月１日～平成30(2018)年１月28日を会期として開催する石岡市立ふるさと歴史館第12回企画展に際して作成したものです。

展示および本冊子の編集・執筆は，石岡市教育委員会 文化振興課（谷仲俊雄）が行いました。

展示にあたっては，以下の文献をはじめ，多くの文献を参考にいたしました。

仲田安夫『桜田事変と佐久良東雄の生涯』暁印書館，1989年

中澤達也『幕末の志士　佐久良東雄―その生涯と交友―』
土浦市立博物館第25回企画展，2001年

「幕末の志士・歌人　佐久良東雄」『常陽藝文』
2012年２月号（通巻345号）

■謝辞

以下の方々・機関にご協力いただきました。ありがとうございました。

平成28年度林小学校６年生のみなさん

石橋　美和子　，　糸川　崇　，額賀　均　，　渡辺　美砂子

石岡市立林小学校　，鹿嶋市文化スポーツ振興事業団　，

京都大学附属図書館

勤皇の志士　佐久良東雄

八郷地区の浦須（うらす）という集落に，風格のある長屋門が建っています。長屋門を通ると広い庭があり，左手には昔ながらの土蔵，そして正面には重厚な茅葺きの主屋があります。江戸時代に建てられ，国の文化財に指定されているこの建物は，「佐久良東雄（さくらあずまお）」という勤皇の志士の生家にあたります。

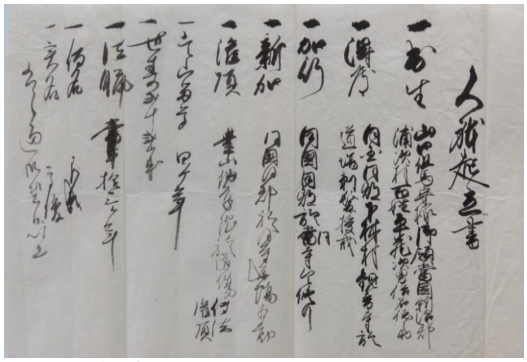
江戸時代後期，文化8年(1811)にこの地に生まれた佐久良東雄は，国学を修め，熱烈な愛国者として多くの人々を指導しました。しかし，万延元年(1860)，当時の権力者・大老　井伊直弼（いいなおすけ）を暗殺した桜田門外の変の関係者をかくまったとして，徳川幕府につかまってしまいました。獄中で東雄は，「吾（われ），徳川の粟は食（は）まず」と唱えて絶食し，自ら命を絶ったと伝えられています。享年50歳でした。

本企画展では，劇的とも言えるその生涯を振り返るとともに，東雄の目指したもの，そしてその後の歴史に与えた影響について考えてみたいと思います。

▲ 生家の長屋門と石碑

天才少年　吉兵衛（きちべえ）

東雄は，文化8年(1811)3月21日，新治郡浦須村（現在の石岡市浦須）の飯嶋平蔵の次男として生まれました。幼名（成人前の名前）を吉兵衛といいました。浦須村は当時牛久藩領で，飯嶋家は代々名主を務めていたと言われています。



▲人躰起立書（じんたいきりゅうしょ）（観音寺蔵）
飯嶋家の長男とされることが多かった東雄ですが，「次男」であったことを示す史料です（右から3行目）。

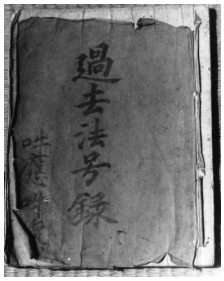
吉兵衛は，記憶力がよく，また何の遊びをしても一番で，神童と言われるようになったといいます。そして，15歳のころには，浦須の隣の地区，片岡にある天神社（天満宮）のおまつりで使用する幟（のぼり）を書く役目に抜擢されました。幟は幅66cm，長さ7m80cmにもなる非常に長大なもの。これだけの大きな文字を書くための太い筆がないことから，稲の穂で書いたと言われています。今でも，この天神社に書を奉納すると書が上達すると言われています。

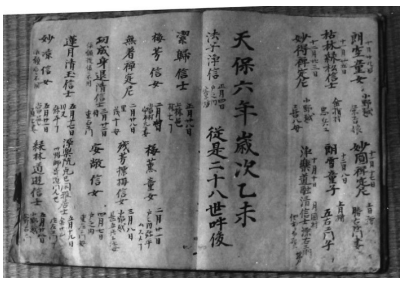
◀ 片岡の天神社
坂道の参道が続いています。吉兵衛はよく友達とかけっこをしたと言われています。

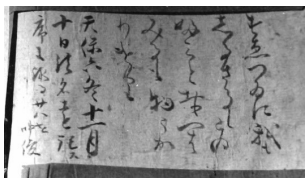
僧になる

文政2年(1819)，9歳（数え年，以下同じ）のとき，下林の観音寺住職の康哉（こうさい）の弟子になります。次男でしたが，長男（兄）についての記録はなく，吉兵衛が後継ぎとして育てられていたようです。それにもかかわらず，家督を姉に譲り，僧となったのは，神仏を敬う父母の勧めによったとも，農民をしいたげる代官や武士よりも格の高い人物になろうとしたとも言われています。

▲師　康哉の墓（上観音寺跡）
（左）桑門康哉墓　（右）遺弟良哉総門下







▲良哉筆の観音寺過去帳（観音寺蔵，市指定文化財）
観音寺住職時には「叶俊」と称した（上右）。過去帳には和歌が走り書きされている（左）。

康哉は，国学者にして優れた歌人であり，吉兵衛は大きな影響を受けます。そして，文政8年(1825)，15歳にして正式に僧となり，「良哉（りょうさい）」と名を改めます。良哉は本山の長谷寺（奈良県）で修行を積みますが，その修行中の天保3年(1832)に師 康哉が亡くなります。良哉の師への思いは深く，墓碑には「桑門康哉墓」「遺弟良哉総門下」と自筆の文字を残しています。

農民の味方　良哉

天保6年(1835)，25歳のとき，土浦真鍋村（現在の土浦市真鍋）の善応寺の住職となります。土浦城下に移り住んだ良哉は，豪商で国学者の色川三中や農政学者の長嶋尉信と親交を深めていきます。色川は良哉より10歳，長嶋は30歳も年長ですが，それぞれと義兄弟の契りを結ぶほどの仲になります。後に長嶋は，三人の仲を次のように述べています。

▲土浦市善応寺の扁額「聖観音」（土浦市指定文化財）
飢饉の後の天保14年(1843)，住職であった良哉の筆と伝えられています。

いかなることにや，吾三人かく齢太く隔たりて，其交左右の手足の如きとなる，世の中にひろしといえとも，これに比すべきもの少なかるべし

良哉が善応寺住職となった天保6年，そして翌年には，冷害による天保の飢饉が発生します。農民が困っているところを見た良哉ですが，自身も蓄えはありませんでした。あるのは師 康哉から譲られた貴重な書物だけ。僧であり研究者でもあった良哉にとって書物は自分の生命と同じ。しかもそれは敬愛する師から譲られたもの。しかし，良哉はその大切な書物を売り，そして義兄弟色川たちとも協力し，農民たちに米を安く売り，多くの人を助けたと言います。

僧をやめ，神に仕える

良哉は，水戸藩主徳川斉昭の腹心である藤田東湖や会沢正志齋とも交流を深めていました。2人からも水戸藩に仕えるように熱心に勧められたと言います。しかし良哉は，「自分にはすでに主人がある。それは京都におられる天皇である」「将軍である徳川は，天皇を軽んじている。水戸藩に仕えることは徳川に仕えることになる。自分は天皇，皇室の復興だけを己の任務と考えている」と言って，仕官を断ったと伝わっています。身分制度が厳しかった時代，農民出身である良哉が，武士に取り立てられることは通常では考えられないことです。にもかかわらずそれを断ったところには，徳川将軍中心ではなく，天皇中心の世の中を作りたいという良哉の気概が伝わってきます。

▲東雄サクラ
写真提供：鹿嶋市教育委員会
写真撮影：渡辺典博
東雄が奉納したサクラ（写真）は数年前に枯れてしまいましたが，今でも後継樹が花を咲かせています。

天保12年(1841)，良哉は色川三中と共同して鹿島神宮に桜の木を千本奉納しています。この頃から僧を辞める決意を固めていったようです。そして，天保14年(1843)，ついに僧をやめます。33歳のときです。一説によれば新月の夜，村中の人を集めたなかで，自らが着ていた袈裟を脱ぎ捨て，火の中に投げ入れたといいます。そして，鹿島神宮に参詣し，神池のなかで7日7夜，絶食し，身を清めたと伝わっています。

天皇のもとへ

僧をやめた良哉は，名を佐久良靭負東雄と改め，江戸に出ます。将軍のお膝元である江戸に滞在するなかで，天皇中心の国を作りたいという想いがさらに高まったのでしょうか。弘化2年(1845)，ついに京都へと向かいます。

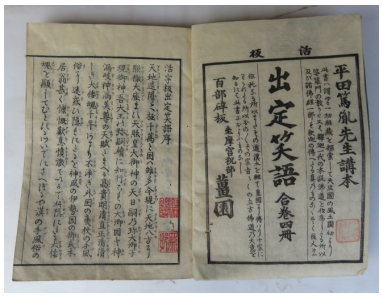
東雄が京都への道中に読んだ歌に次のものがあります。

一歩み　歩めば歩む　度毎に
京へ近く　なるがうれしさ

天皇のもとへと近づくうれしさがひしひしと伝わってきます。

嘉永2年(1849)，東雄は大坂坐摩神社の神職となります。そこで国学の指南にあたるとともに，多くの国学書の出版に携わり，国学の普及に努めました。

▲坐摩神社（大阪府大阪市）
境内には「佐久良東雄寄寓奉任の処」の石碑が建つ(右)



▲出定笑語（飯嶋家蔵）
右には「坐摩宮祝部　薑園」とある。「薑園」とは東雄の別名。

ペリー来航 ―決意

君がため　よもの丈夫　筆捨てて　つはものとらむ　時ぞこの時

※丈夫…一人前の男子　　※つはもの…武器

鎖国中の嘉永6年(1853)，開国を迫るアメリカのペリー，通称「黒船」が来航した際に，東雄が詠んだ歌と言われています。東雄43歳のとき。その決意のほどがうかがえます。

開国に対し，当時の孝明天皇は反対。しかし，翌安政元年(1854)，徳川幕府は開国を求めるアメリカに屈し，開国。そして，安政5年(1858)には日米修好通商条約を締結し，鎖国は終わりを告げます。

鎖国から開国へという国の方針の大転換を天皇の許可を得ずに実行した江戸幕府に対し，将軍の後継ぎ問題も絡み，批判が起こります。また，天皇も，京都に来て，説明するよう命じます。しかし，時の幕府の権力者・大老　井伊直弼は，これを無視。このような井伊直弼の行動に対して不満を抱き，天皇を尊び開国に反対する「尊王攘夷運動」が全国に広まっていきます。

これに対抗すべく，井伊直弼は，反対派を次々と処罰していきます。前の水戸藩主であった徳川斉昭や，高杉晋作や桂小五郎の師である吉田松陰らが処罰され，吉田松陰は死刑となります。安政5年(1858)から翌年にかけて次々と反対を処罰していったこの出来事は後に「安政の大獄」と呼ばれ，死刑になったものや獄死したものは10人以上になる，大弾圧となりました。

息子へ ―遺言

安政7年(1860)3月3日，江戸城に登城しようとしていた大老 井伊直弼が，桜田門外において襲撃されます。安政の大獄によって前藩主が処罰された水戸藩士が中心となった総勢18人の襲撃でした。この襲撃―「桜田門外の変」により井伊直弼は殺害されます。

同じ頃，桜田門外の変の首謀者のひとりでもある水戸藩士の高橋多一郎(たいちろう)は，薩摩藩の有志と連携し，京都・大坂で挙兵の準備を進めていました。しかし，薩摩藩がまとまらずに挙兵は失敗。志を同じくする東雄は，高橋をかくまり，幕府の厳しい追及にさらされることになります。日増しに幕府の追手が迫っていることを覚悟した東雄は，15歳になる息子の石雄(いわお)あてに遺言状をしたためます。遺言状は，3m以上にも及ぶ長文なもの。そのなかで東雄は，日本は王朝が何度も変わった中国などと異なり，皇統不変の神国である。天皇を中心としたこの国のあるべき姿を確立するために，楠木正成のごとき忠臣になることだけを心がけよ，と説いています。

ちなみに遺言状の日付は，「安政七申年三月十八日夜」。この日は「万延元年」と元号が改められた日でした。東雄はその情報に触れることなく，遺言状をしたためていたのでしょう。

そして，その5日後の3月23日早朝，高橋多一郎は，東雄とともにかくまっていた島男也(しまおとや)の家で幕府の追手に見つかります。逃れられないと覚悟した高橋多一郎は，息子とともに自殺してしまいました。

捕まる ―「徳川の粟は食まず」

高橋多一郎が捕まった万延元年(1860)3月23日，東雄も大坂の町奉行所につかまり，大坂松屋町の牢獄(ろうごく)につながれてしまいました。そして，5月，大坂から江戸に護送されます。一説によれば，東雄は江戸に護送される途中，宿の主人や同宿したものたちに「古事記」の講義をしたと言われています。

江戸に着いた東雄は，伝馬町の牢獄につながれます。ここでも一緒になった牢人たちに「古事記」の講義をしたと言われています。

東雄は，牢獄のなかでは「吾，徳川の粟を食まず」として絶食。そして，6月27日，餓死したと伝えられています。享年50歳，49年の生涯でした。

遺体は，いったん江戸小塚原回向院(こづかっぱらえこういん)(東京都荒川区)に葬られましたが，明治2年(1869)に大阪，そして昭和7年(1932)には，かつて住職をつとめた土浦市善応寺に改葬されました。

▲佐久良東雄の墓（土浦市善応寺，土浦市指定文化財）

明治維新 ―受け継がれた想い

東雄が死亡した7年後の慶応3年(1867)，江戸幕府の将軍徳川慶喜は，政権を明治天皇に返上します(「大政奉還」)。そして，翌1868年には明治政府が発足。明治維新がはじまります。

明治維新とは，徳川将軍の江戸幕府から，天皇中心の明治政府への転換。まさしく東雄が目指していたものでした。明治維新の改革を進めていったのは，大久保利通や西郷隆盛，木戸孝允ら。彼は1830年前後生まれで，当時30代後半。東雄は1811年生まれなので，明治維新のときに生きていれば57歳になります。明治維新を進めていったものたちの兄というよりは親の世代。明治維新の精神的指導者と評価されている吉田松陰よりも上の世代であり，彼らの思想のもとを築いた人物と言えます。

東雄は明治維新を待たずに亡くなりましたが，その想いは受け継がれ，明治維新という形で実を結んだと言えるのです。

明治天皇から表彰

明治31年(1898)，東雄に「従四位」という位が明治天皇から贈られます。農民出身で牢獄で餓死したものに与えられる位としては破格のもの。東雄が明治維新に果たした役割が，明治天皇，明治政府に評価されたものと言えます。

そして，昭和18年(1943)1月，文部省発行の教科書に東雄が掲載されます。「初等科修身　四」という，日本中の国民学校初等科6年生（今の小学校6年生）が使う教科書に載ったのです。石岡市出身で教科書に載ったのは，今のところ，東雄だけです。

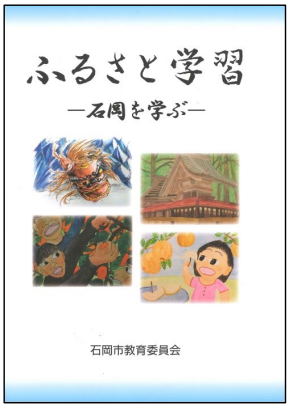
また，昭和19年3月には，生家が「佐久良東雄旧宅」として，国の史跡に指定されました。茨城県内の旧宅で「史跡」指定を受けているのは，ここだけ。幼少期を過ごし，日本のあるべき姿を考えた，東雄「原点」の場所であり，いく度かの修理を経ながらも，今なお現役の民家として，東雄の想いを伝えています。

▲東雄神社境内の贈従四位記念碑

石岡市「ふるさと学習」

石岡市では，平成28年度より小中学校において「ふるさと学習」がスタートしました。それに伴い，石岡市の歴史や文化などについて1冊のテキストがまとめられました。府中塾，山根塾という市民有志の団体の協力のもと，市内の小中学校の先生たちで立ち上げた推進委員会がまとめた石岡市独自のテキストです。こどもたちはこのテキストをもとに，小中学校の9年間にわたり，ふるさと石岡について学んでいきます。このテキストのなかで佐久良東雄は，小学校6年生の「石岡市と関係のある歴史的な人物について調べよう」という単元で，1ページにわたって取り上げられています。

初年度にあたる平成28年度に，東雄の地元である林小学校で，東雄の生き方を学び，考える授業が行われました。



佐久良東雄　　佐久良東雄旧宅

幕末の志士・歌人　佐久良東雄　(1811年～1860年)

佐久良東雄は，常陸国新治郡浦須村（現・茨城県石岡市浦須）の飯島平蔵の子として生まれました。生家は代々名主を務める家でした。9歳で下林村の観音寺に入り，住職の弟子となって，そこで国学を学びました。

石岡市と関係のある歴史的な人物について調べてみましょう。

東雄の代表的な歌

「天皇に仕へまつれと
　　我を生みし
我がたらちねぞ
　　尊かりける」

(現代語訳)

「天皇にお仕えせよと私を生んでくださった私の母親は，なんと尊い人であろうか」

東雄の最期

桜田門外の変に関わった水戸藩士をかくまったという理由から，幕府に捕らえられました。東雄は，「吾，徳川の禄を食まず」と絶食し，江戸伝馬町の牢中で亡くなったと言われています。年は49歳でした。

「佐久良東雄の生まれた家が国指定の史跡になっているのは道沿いにある看板でみたことがあるよ。」

「江戸時代末期に生きていた人だから，日本が開国したことや江戸幕府の終わりと何か関係がある人かな。」

「東雄は，小さい頃から文学を好み，仏門に入ってからは歌人として知られるようになりました。また，勤皇の志士としての活躍が東雄の功績として評価されています。」

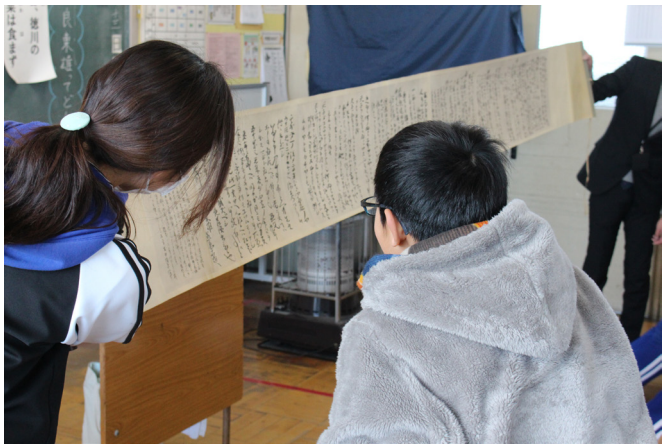
「勤皇ってどんな考えのことですか。」

「天皇自らが政治を行う社会を実現しようとした考えです。幕末から明治にかけて混乱した社会の中でこの考えは，社会に大きな影響を与えました。」

「石岡にも，幕末期に活躍した人がいたんだね。東雄の他にも，石岡とかかわりのある歴史的な人物について調べてみようよ。」

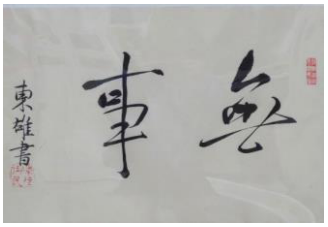
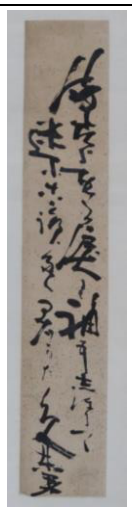
山根塾資料 No.2

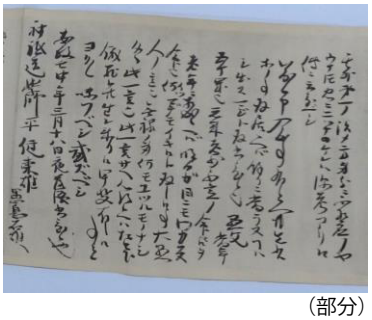
▲ふるさと学習のテキスト



林小学校　ふるさと学習の様子

展示品一覧

	展示品名	時　期	写　真	所有者
1	飯島吉兵衛筆　幟（写真）	伝　文政８年 (1825)		原資料：片岡地区
2	佐久良東雄筆「無事」（複製）			原資料：善応寺
3	佐久良東雄筆　短冊			石岡市教育委員会
4	佐久良東雄筆　長歌（写真）			原資料：京都大学 附属図書館 （同　写真提供）

5	佐久良東雄筆　長歌（写真）	安政６年(1859) 12月17日		原資料：京都大学 附属図書館 （同　写真提供）
6	佐久良東雄筆　遺言状（複製）	安政７年(1860) ３月18日	 （部分）	原資料：個人
7	望月茂著 『佐久良東雄』 大日本雄辯會講談社	昭和17年(1942) 11月初版発行		個人
8	贈従四位大久保要先生 贈従四位佐久良東雄先生 史蹟絵葉書 第一輯 （大久保要先生佐久良東雄先生遺蹟顕彰會）			個人
8	『さくら』佐久良東雄顕彰会 ２号・３号合併号 ５号・６号合併号 佐久良東雄没後145年記念事業特集号	平成６年(1994) 平成10年(1998) 平成18年(2006)		石岡市教育委員会

石岡市立ふるさと歴史館第12回企画展

佐久良東雄

—石岡が生んだ勤皇の志士の生涯

平成29年11月１日発行

編集・発行

石岡市教育委員会　文化振興課

〒315-0195　石岡市柿岡5680-1

TEL　0299-43-1111

石岡市立ふるさと歴史館

〒315-0016　石岡市総社1-2-10

TEL　0299-23-2398